野呂有子「『復讐者の悲劇』の構造と結末」『アポストロス』第３号、東京教育大学大学院英米文学会、1976、13-21.

『復讐者の悲劇』の構造と結末

金窪有子

＜諺のいうように、くり返された事は人の気に入るかどうかは知らないが、少なくとも、くり返された事は意味を持つと私は信じているのだ＞（ロラン・バルト、『神話作用』より）

この劇には、ジェイムズ朝の悲劇をどす黒くおおう殺人、姦淫、復讐のイメージが強烈に現れている。それらを目のあたりにして、眩暈に襲われるような錯覚に陥るのは私だけであろうか？

にもかかわらず、このペーパーは、あえて劇の構造を明らかにし終結部における主人公の扱い方に一つの解釈を与えるのをねらいとしている。

一幕一場から、髑髏を手にする主人公ヴィンディスと、幽霊のように舞台を横切る悪党の行列とに、客席はしんと静まりかえるだろう。好色な老公爵、やはり好色な嫡子ラシュリオーゾ、妾腹（といえば好色の道ではその嫡子）、淫乱な公爵夫人と悪党は四人とも七つの大罪を代表する色欲の具現者だ。ヴィンディスは、この「骨の髄まで好色に」しゃぶられた連中に対する復讐者なのだ。彼は恋人を、悪党の頭目である公爵に毒殺された。手にもった髑髏はそのなれ果てなのだ。

ヴィンディス　　さあ楽しいぞ、しゃれこうべ、いよいよ出発だ。ぬくぬく太ったやつらはお前の姿を見て震えあがるが、あいつらの豪奢なまとい、ふかふかのビロードの肉を骨からすっかりこそげ落としておまえそっくりの裸にしてやる。

「公爵への復讐」という劇のテーマの間に、次の場への序曲が用意されている。それはヴィンディス一家の会話の中にさりげなくくるまれている。

グレイシャーナ　　カルロかい、宮廷では何か変わった事でもありますか？
ヒポリト　　はいお母さん、公爵夫人の末の連れ子がアントニオ卿の奥方を手込めにしたという噂です。

アントニオの妻は「貞節」で名だたる夫人であって、この「末子による夫人の強姦」は、先の「復讐」のテーマに対位するものとして劇を流れ始める。

一場でほのめかされた「末子の強姦」は二場でクローズ・アップされる。裁判の席上での公爵夫人の「どうぞこの子も本当の子と思し召して」という嘆願にも拘らず、連れ子は赦免されない。裁判は延期され、彼は獄につながれる。実の兄スーパヴァッキオとアムビショーゾは彼を牢から救い出そうと画策し、母である夫人は、夫が末子を助けないのを恨

み復讐を誓う。そして妾腹と姦淫を行う。「末子の強姦」のテーマは「夫人の姦通」という変奏曲を生み出したのだ。

三場では、「公爵への復讐」の為に、ヴィンディスは変装してピアトと名のり、公爵の嫡子ラシュリオーゾに取り入る。そこで彼が嫡子から命じられたのは、妹カスティーザを誘惑して、この色欲の子の餌食にする仕事だった。この事の為に彼は嫡子にも復讐を誓う。

一幕で復讐を誓い、変装を予告して家族を後にしたヴィンディスは、その変装ゆえに女衒として妹を誘惑し、家族を分断するはめに陥ったのだ。このように「公爵へのヴィンディスの復讐」は、「家族の分断」と「嫡子への復讐」という二つの変奏曲を派生させる事となった。

四幕では、強姦されて自決したアントニオ夫人の遺体を前に、夫の口から惨劇のようすが語られる。

> 先の宴会の夜の事、仮面劇を演ずる臣下たちは、おのれの素顔を麗々しい仮面の下に隠していたが、その中の一人に公爵夫人の末子が加わっていた。・・・・あいつは恥知らずな仮面に負けぬ鉄面皮の顔で襲いかかった。・・・・妻は恥辱のうちに生きるよりは毒を仰いで死ぬことを心に決めたのでした。

遺骸を前に、諸侯とヴィンディスの弟ヒッポリトは、裁判の延期を怒り、復讐を誓う。

彼らを前に、アントニオは誇らしく妻の死を語る。

> それはあえて奇跡と呼び得る程の素晴らしい幸福です。私のような老人がこんなにも貞節な妻をもったという。

老公爵による裁判の延期と末子の投獄の命令が、一方で「公爵夫人の姦通」を促すと共に、又、一方ではアントニオやヒッポリトらによる「末子への復讐」という変奏曲を派生させたのだ。

このように、第一幕では「ヴィンディスの復讐」と「末子の強姦」の二つのテーマが交互にくり返される。それらは、くり返されながら変質しながら分裂して筋を複雑にして行く。

「ヴィンディスの公爵への復讐」は、変装を契機として「家族の対立」と「嫡子への復讐」という二つの副産物を派生させる。一方「末子の強姦」は裁判の遅滞を契機として「公爵夫人の姦通」と「末子への復讐」という、やはり二つの副産物を派生させる。

しかも、一つのテーマの二つの副産物というのは任意のものではなくて、相矛盾する二つの価値をはらんでいる。ヴィンディスは「公爵への復讐」を完遂するためにこそ、自分にとっては不利益な「家族の対立」におもむくのだし、ラシュリオーゾは、自分の利益をねらって「家族の対立」を促した為に、自分への「復讐」という不利益極まりないものを

しょいこむのだ。又、「末子の強姦」では老公爵は裁判を延期した為に、つまり末子を赦免にしない為に「夫人の姦通」を促し、その一方、末子を即刻死刑にしない為に「末子への復讐」を促してしまうのだから。

第二幕では、交互に呈示されていた二つのテーマが絡みあって悲劇の前奏となっていく。

一場では、ヴィンディスが母と妹を誘惑しに、変装した姿でやってくる。きらびやかな宮廷から貧しい家へ。妹からは猛烈な反撃を食らうが、母は金に目がくらみ、逢引の手引きを承諾する。ここで家族は対立し、「母の堕落」が響き出す。

カスティーザ　奥様、お許し下さいませ。私はあなたを見違えておりましたわ。私の母を見かけませんでしたでしょうか？・・・・あなたは本当にお母様なのですか？ああ世間もすっかり変わってしまって人間の姿まで見分けがつかなくなった。母親を見分けられる子は今じゃ余程賢い子に違いない。

母親の承諾をもって宮廷に帰ったヴィンディスは、公爵夫人と妾腹の密通が今夜あるという情報を得る。一方、妾腹も嫡子がヴィンディスの手引きで今夜不貞を働くという情報を得る。ここで二つのテーマのそれぞれの変奏曲が絡まり始める。「母親の堕落」（＝「嫡子の不貞」）と「公爵夫人の姦通」の二つが。

妾腹は密通を延期して嫡子を待伏する。そうとは知らぬヴィンディスは、嫡子に「夫人の密通」の情報を流して、妹を嫡子の毒牙から救う。二つの変奏曲は絡み合って衝突する。

嫡子が勇んで抜刀し、夫人の寝室に踏み込むとそこには父公爵と夫人が居る。彼は父殺しの大罪を犯したとして獄につながれてしまう。

しかし、ここぞとばかり嫡子の失脚をねらう夫人の息子アムビショーゾとスーパヴァキオの言葉に、彼らの意図を見抜いた公爵は却って嫡子を赦免してしまう。

このように二幕では、一幕で呈示された二つのテーマの変奏曲が絡みあって衝突し、奇妙な効果を生み出している。この効果は、あえて呼ぶなら相殺効果とも言うべきものだ。相次ぐ悪だくみはどんでん返しを重ねてすべてを無に帰してしまう。実際には凌辱も姦通も父殺しも処刑も何も起こらない。この幕は、血なま臭い劇の間にあって、むしろ喜劇的な幕である。

三幕に入ってもこの喜劇的な効果の余韻は続く。アムビショーゾ兄弟の自画自賛の「すばらしい」策略は滑稽でしかない。なぜなら嫡子は赦免と決まっているのだから。

しかし三場に入ると事情は変わってくる。役人に向かって発される「公爵の御子息」という語が皮肉な重さを持って響き出す。嫡子が釈放された今、役人にとって「公爵の御子息」とは、アントニオ夫人を強姦して牢にいる末子以外の何ものをも意味しない。こうして、公爵の「本当の子」ではなかった為に許されなかった末子は、「公爵の御子息」として首をはねられてしまう。しかも、正当な裁判や復讐によってではなく、人違いの為に。

前幕が喜劇的であればそれだけ、突然の死刑は悲劇的である。こうして末子の死は、次に続く悲劇の序曲となって劇を盛りあげていく。

五幕に到って、テーマの一つ「ヴィンディスの公爵への復讐」がなされる。その復讐のやり方は、恋人の髑髏に仮面と衣装をつけて老公爵の火遊びの相手にしつらえるというこったものだ。

ヴィンディス　　俺はこいつを役にも立たぬ小道具として、ただ見世物にする為にこしらえたんじゃない。こいつにはこいつ自身の復讐の現場でこそ一役買わせてやらなけりゃ。

唇に毒をぬられた髑髏。そうとは知らぬ公爵は、自分が毒殺した婦人の髑髏との接吻によって毒殺される。しかも、公爵夫人と妾腹の密通を目のあたりにしながら。

ここでは「公爵への復讐」のテーマと「夫人の姦通」という変奏曲とが、響き合って相乗効果を産み出す。「復讐」のテーマは高らかに鳴り渡って劇はクライマックスを迎える。

しかし、劇はここでは終わらない。気になるのはヴィンディスの捨て台詞だ。

さて、誰がなるかは知らないが、これでこの国にも新しい頭が必要になった。どんな奴がでてこようとも、出てきた奴はかたっぱしからたたき切ってやろう。

彼の「公爵への復讐」は完結した。しかしそれから派生してきた「嫡子への復讐」、「母の堕落」といった問題は片付いていない。今度はそれらが代わって劇の主流となっていくのだ。

復讐を果して意気揚々と引き揚げるヴィンディス兄弟と入れ代わりに嫡子を死刑にしたと思い込んで有頂天になっているアムビショーゾ兄弟が入ってくる。この場は前の場のバーレスクとなっている。

ヴィンディス兄弟が力を合わせ、ともかくも妹を窮地から救い出し、憎いかたきを死に追い込んだのとは対照的に、アムビショーゾ兄弟は手柄の取り合いをし、計画とは逆に目ざす敵をとり逃がし、代わりに弟を死なせてしまったのだから。ヴィンディス兄弟の用意周到な策略には、と比べ、彼らの計画のなんとお粗末極まりない事か。

ここで二つのテーマ「ヴィンディスの復讐」と「末子の強姦」とが明確に対比される。前者は復讐を完璧に仕上げてクライマックスに達し、後者は、復讐されるべき末子が手違いで死ぬ事からアンティ・クライマックスを迎えるのだ。

しかしながら、この決定的な対比の後には、同一の変奏曲が続く。

ヴィンディスには、公爵に復讐する為の変装から派生した「嫡子への復讐」が残されているし、アムビショーゾ兄弟にも、末弟を誤って死に到らしめた事から、嫡子への憎しみは一層深くなっている。

アムビショーゾ　きっとこの恨みは晴らしてやるからな、さあ暗い悲しみを投げ捨てて、復讐に思いをこらすのだ。いやましに深まるこの憎悪を思いつめよう。――ラシュリオーゾ、じたばたするなよ、みんなひきずり落としておいて、最後にお前をたたきのめしてやる。

かくして「嫡子への復讐」は二重にもくろまれる。そして、復讐がうまく行く事は、ヴィンディスの公爵殺害の手並の鮮やかさによって予想され、アムビショーゾ等の強められた憎しみによって保証される。

第四章は、三幕までに行われた事の事態収拾と嫡子殺害の準備にあてられる。

嫡子が赦免された今、ヴィンディスにとってピアトの衣装は何ら意味をもたない。それどころか危険極まりないものでさえある。「偉いお方の秘密を聞き知って、しかも信用のおけぬような奴は、白髪の老年を迎えることはできない」のだから。

しかし、嫡子を討つ為には、あやしまれずそばにいなければならない。このようにピアトとして嫡子の前から姿を消して、ヴィンディスとして返り咲く事は劇の流れの上での必然性に基づいている。

ピアトの衣装をぬぎ、不満家として現れたヴィンディスに、嫡子はピアトを殺せと命ずる。これは「嫡子への復讐」をもくろみ変装をといた為に派生した新たな変奏曲である。彼はこの難題を、公爵殺害と同じ程の手際良さで切り抜ける。

ヴィンディス　いいかい、老いぼれの公爵は死んでしまったが、まだその後始末はついていない…あの老いぼれに着せる衣装は私の（変装のために）着ていた衣装なんだよ。だから私が、つまり女衒と呼ばれたピアトの方が、公爵を殺して公爵の衣装を着て逃げて行ったのだと思われるだろう。死体に自分の衣装を着せておいたのは、すばやい追求の手をかわすためだって事になる。

しかし、早速それにとりかかろうとする弟に彼は「まあまて、今思いついた事だが、途中でちょっと一仕事、お母さんにとりついた卑しい悪魔を払いおとしてやらなくては。」と言って舞台を去る。「公爵への復讐」のテーマから派生した「母の堕落」が再びスポット・ライトを浴びるのだ。

三場に入ると「末子の強姦」のテーマより派生した「公爵夫人の姦通」が再び鳴り始める。夫人は妾腹と手に手をとって登場するがその後抜刀したスーパヴァキオが駆け込んでくる。やっと兄に押しとどめられて彼は言う。

素晴らしいお母さんだっただけになんといやらしい転落ぶりだ。 . . .兄さん、行こう、追いかけていって引き離さそう。二人の罪の素早さ、あとで悔やんでも間に合わぬ。

「公爵夫人の姦通」はアムビショーゾ兄弟にとっては「母の堕落」に他ならない。そしてこれは二場の最後に流れ始めたヴィンディス兄弟にとっての「母の堕落」に合流して、四場に流れ込んで行く。アムビショーゾ兄弟が退場すると、いれちがいに短剣をもち、女を引きずって、二人の男が登場する。二人は女を「母」と呼び、罵り始める。ヴィンディス兄弟と母、グレイシャーナなのだが、演出の仕方にもよるが、暫くの間はア

ムビショーゾ兄弟と公爵夫人の姿がそれぞれにオーバーラップしてまるでアムビショーゾ兄弟が夫人を罵っているような錯覚に陥る。

初めはヴィンディス兄弟のバーレスクとして扱われていたアムビショーゾ兄弟だが、「嫡子への復讐」と「母の堕落」という同一の調べを通して次第にヴィンディス兄弟への接近を見せ始める。

二人の厳しい叱責にグレイシャーナは改心してカスティーザと和解する。かくして「母の堕落」の調べは「母の改心」に変質し、グレイシャーナの結語

> おまえが世の娘たちの鑑になるように、私は母親の鑑になりましょう。

によって完成されあがなわれる。

第五幕に入るとヴィンディス兄弟が老公爵の死体に変装させて、舞台に引きずり出して来る。

初め死体を、泥酔したピアトと思い込んだ嫡子はヴィンディス兄弟をせきたてて刃をつきたたせる。やがてそれが父の死体だと気づいて彼は、ヴィンディスの策略通り、ピアトの仕業としてそれを宮廷に広める。ここで公爵づきの紳士が職務怠慢のとがで処刑される。彼はいよいよ大詰めを迎える悲劇の前ぶれであり、犠牲者の一人なのだ。

ラシュリオーゾの公爵継承を祝って饗宴が開かれる事になる。そこで「二人の知恵の有終の美を飾ろう」とヴィンディス兄弟が立ち去った後、妾腹も嫡子殺害を誓って退場、残されたアムビショーゾ兄弟は殺害計画の具体的イメージを我々に与える。

> 仮面劇は謀叛の自由な隠れ蓑、そいつを頼りにするとしましょう。人殺しの顔には仮面が似合うものです。

この「仮面」という響きは先の二つのテーマ、「老公爵への復讐」と「末子の強姦」に共通する基調である。老公爵は仮面をつけた髑髏の毒で死ぬのだし、末子は仮面をつけてアントニオの夫人を強姦したのだ。

二つのテーマから派生した共通の変奏曲「嫡子への復讐」の調べのうちに「仮面」のイメージが響き出し、次第にその振幅は大きくなっていく。

二場ではヴィンディスが在野の貴族達に、ラシュリオーゾ打倒の細かな計画を打ち明けている。

> もうすぐ宴会です。長い間みなさんを押さえつけていた貴族達は仮面劇の準備に大わらわ。今、衣装がつくられている所、いいですか、そこにわれわれの楽しい復讐が待っているのです。色合いから飾りつけ型にいたるまで髪の毛一本たがわぬ出来あがり、そこでだ、われわれが最初に入って行く。踊りの順序をよく見極めていれば、だれにもとがめられずうまく刀を抜く機会がきっとあるはず。

野呂有子「『復讐者の悲劇』の構造と結末」『アポストロス』第３号、東京教育大学大学院英米文学会、1976、13-21.

初めバーレスクとして描かれていたアムビショーゾ兄弟が「母の堕落」と「嫡子への復讐」を通してヴィンディス兄弟と次第に似通ったものになった事は前にも述べた。この類似は、今や両者が共にその復讐の機会を仮面劇に求めた事で、いっそう著しくなった。[1]

宴会の席について貴族から祝辞を受けるラシュリオーゾの前に、「天の怒りのしるし」である「赤く燃える彗星」が現れる。おそれおののく彼に家臣達はこぞって長寿や不老不死を口にするが彼らは皆、すぐその後に入ってきた仮面劇の一隊四人によって刺し殺されてしまう。

彼らが立ち去ると又別の仮面劇の一隊が入ってくる。彼らは新公爵が殺されているのを見ると仲間割れを始めて殺し合い倒れていく。そこへ、最初の四人が駆け込んで来て謀叛を知らせる。

ここで一幕四場以来初めてアントニオが登場する。彼は言う。

> ああ何という悲劇、この有様を見ては老人の目も真赤に充血する。

仲間割れを起こした仮面劇の生き残りの廷臣は妾腹を殺したのに、思い違いによるラシュリオーゾ自身の証言によって公爵殺害のとがで処刑される。ここにおいて「嫡子への復讐」はクライマックスに達する。「重ね積もった死によってみごとに」仮面のイメージは、最高のふくらみをもって劇全体をおおう。

しかしこの後にはアンティ・クライマックスが待っている。

我々は思い違いからすでに何人かが死んでいる事を知っている。アントニオによって復讐されるべき末子は牢番の思い違いから突然の死刑を執行され、スピューリオを殺した廷臣はラシュリオーゾ殺しの犯人として処刑されてしまった。それゆえヴィンディスが公爵殺しの犯人が自分である事を打ち明けた時のアントニオの反応は、我々には奇異には感じられない。

> アントニオ　あのような老人をよくもまあ！　彼を殺したからにはわたしをも殺すであろう。

確かに老公爵は「老人」であった。しかしヴィンディスは「老人」だから公爵を殺したのではない。彼が色欲に狂った老人であり、恋人を毒殺したからこそ復讐したのだ。公爵は、たまたま「老人」であったにすぎないのだ。「老人」でなくてもヴィンディスは彼に復讐しただろう。ここにアントニオ卿の思い違いがある。

では、なぜアントニオは上の台詞を口にしたのだろうか？

それは「老人」という語が彼にとっては特別な意味合いを持つからだ。一幕四場の彼の台詞を思い出してみよう。

> それはあえて奇跡と呼び得る程のすばらしい幸福です。わたしのような老人がこんなにも貞節な妻をもったという。

[1] Lawrence J. Ross, *The Revenger's Tragedy*. Edward Arnold Ltd. 1971. p. 28.

野呂有子「『復讐者の悲劇』の構造と結末」『アポストロス』第３号、東京教育大学大学院英米文学会、1976、13-21.

アントニオにとって「老人」とは「貞節な妻をもてる」事を意味する。そして「貞淑な妻」は「貞淑なカスティーザ」と共に、この世における「神の正義」の具現者である。つまり彼にとって「老人」とは「神の正義」を持てるものなのだ。それゆえ「老人」を殺す事は「神の正義」を打ちこわす事に他ならない。

かくて、ヴィンディスは末子や廷臣と同様、思い違いによって処刑されてしまう。

しかしながら、アントニオ卿の思い違いは、思い違いとしては認知されない。なぜなら、「母の堕落」、「嫡子への復讐」、そして仮面による嫡子の殺害を通して、ヴィンディス兄弟は、もはやアムビショーゾ兄弟と同質の悪党になり下がっていて、その卑劣さは舞台から消える事が望まれているのだから。更に「ヴィンディスの公爵への復讐」に使われた「仮面」も「末子のアントニオ夫人強姦」に使われた「仮面」に呼応し、嫡子殺害に使われた「仮面」の上にオーバーラップしてくる。復讐の道具としての「仮面」は、「悪事の隠れ蓑」としての「仮面」に変質してしまうのだ。

ヴィンディス自身の口を通しても又、その失脚が正当化される。

> 人殺しがいくら罪をかくしておこうとも呪いがまとわりついて離れない。たとえ探り出せるものはいなくても結局は自分から白状してしまうものなのさ。 . . .そういえばあのピアトの奴、いつか気のきいた台詞をぬかしていたな。人殺しはいつかきっと自分で自分の罪をあばく時が来るものだと。

この「人殺しの告白」のイメージはすでに劇の要所要所で注意深く繰り返されてきたものである。例えば末子の裁判のシーンでは、裁判官が「高貴なる人物の罪は屍衣を破って現れるものでございます。」と公爵に警告し、公爵はそれに同意する。そして誤解から嫡子に殺されそうになった時、彼は次のように口走る。

> 眠っている所を殺さないでくれ。わたしにはいろいろ大きな罪がある、どうかあと数日、いや数ケ月あれば、悔い改めの溜息と共にその罪を取り除き、清らかな身で死ぬ事ができる。

四幕二場ではヴィンディスが「それに殺人はどんな固い殻をも破ってはじけるものだからな」というとヒポリトが「その通りです。」と答えている。

こうした下地の基に発されるヴィンディスの退場の辞は説得性をもっていて、何ら抵抗なく観客に受け入れられてしまい、劇は、土壇場でのアントニオの思い違いによるヴィンディスの処刑というアンティ･クライマックスの内に幕を閉じる。

『復讐者の悲劇』では、「仮面」「変装」「思い違い」などが劇の強力な推進力となっている。これらは「ヴィンディスの老公爵への復讐」と「末子のアントニオ夫人強姦」という二つのテーマに作用して、この二つを対照させ、絡み合わせ、反撥させ、共鳴させて相乗効果と相殺効果を生み出し、劇を大詰めへと追い込んでいく。

では、なぜこれらが強力な推進力となり得るのか？それはそれぞれが一つの形象の裏に、相反する二つの意味を同時に持ち得るからに他ならない。

野呂有子「『復讐者の悲劇』の構造と結末」『アポストロス』第３号、東京教育大学大学院英米文学会、1976、13-21.

「仮面」は正当なる復讐の表象であると同時に、邪悪な姦淫・謀叛の表象でもある。「変装」も又、復讐者の表象であると同時に女衒・売女の表象でもある。「思い違い」は前の二つとは少々異なっている。それは表象とはいえない。しかし一つの話、一つのイメージが、相対する二つの事物を示している事には変わりがない。「公爵の御子息」はアムビショーゾ兄弟にとっては憎いラシュリオーゾを意味する語なのに、牢番にとっては、それは、彼らの愛する弟を意味する。又、「老人」は色欲にただれた老公爵を意味すると同時に、貞節な妻を持った誇り高きアントニオ卿を意味する。

それだけではない。実は『復讐者の悲劇』そのものが相対する二つのテーマを持っているのだ。「ヴィンディスの復讐」とは「色欲への復讐」であり、「末子の強姦」とは「色欲」そのものなのだから。

このように、一つの語、一つのイメージ、一つの表象そして一つの劇における重層性が、劇そのものを、奥行きと深みを持った「虚の空間」[2]の構築物として我々の前に呈示するのだ。

相反する価値が一つの枠の中に集約されているこの構築物の背後に、我々は十七世紀の人間（斎藤美洲氏をして「奇妙な両生類」と呼ばせしめた）の一人であるターナーの像を見る。

神を捨て切れないながらも神の無い世界を描かざるを得なかった為に、彼はこの劇を『復讐者の悲劇』と名打ちながらもアンティ・クライマックスで終えざるを得なかったのだ。

[2] Susanne K. Langer, *Feeling and Form*. New York: Charles Scribner's Sons. 1953. p. 69.

※なお、テキストからの引用は殆どすべて筑摩書房『エリザベス朝演劇集』（『復讐者の悲劇』）は大場建治訳）による。